

① 《特集》 アゴラ連載100回 改めて問う「集う場」の意味

⑪ 《うおろ君の気にな～るゼミナール》

「ケアの倫理」って？

「連載150回」記念企画&インタビュー

⑭ 《この人に》

尾上 浩二さん（障害者インターナショナル日本会議 副議長）

⑯ 《V時評》

大音響の衝撃、駅で考えたこと

⑰ 《実録・市民活動「私のいちばん長い日」》

とむらいのコミュニティ

——死を通して、生きるを考える

秋田 光彦（浄土宗應典院住職、大蓮寺老僧）

⑱ 《東日本大震災 福島発～現地から伝える「被災地の今」》

消滅危機のふるさとで「人をつなぐ場」に
再開を決めた老舗旅館

掃部 郁子（フリーランスライター、NPO法人うつくしまランチ 理事）

⑲ 《市民活動川柳》

第1回入選作発表

⑳ 《NPOのための ほっこり法律相談》

要配慮個人情報—NPOの現場での扱い方

樽本 哲（弁護士、一般社団法人全国レガシーギフト協会 共同代表）

㉑ 《情報ピックアップ》

㉒ 《アゴラ／ライブラリー》

いくPAの図書室～ふくろうの森～／書籍紹介

㉓ 《晴れ時々ボランティア》

奥田 育実 さん（ひまわりアート実行委員会 代表）

※「現場は語る～コーディネートの現場から」は休載しました

ヴォロを読む会

次回開催は2026年11月20日(金)12:10～12:55の予定です！



じぶんの町を良くするしくみ

赤い羽根共同募金

共同募金は、地域をつくる市民を応援していきます。

例えば……



地域で、子育てのお手伝いをしたり、
悩んでいるお母さん、お父さんの
相談にのる活動や、



障がいのある人が、まちで幸せに暮らせ
るお手伝いをする活動や、



地域で、1人暮らしや寝たきりの高齢者
に、栄養の整った食事を届ける活動や、



地域に住むみんなが「安心・安全」に
暮らすための活動や、

地域のいろいろな活動のために役立てられます。

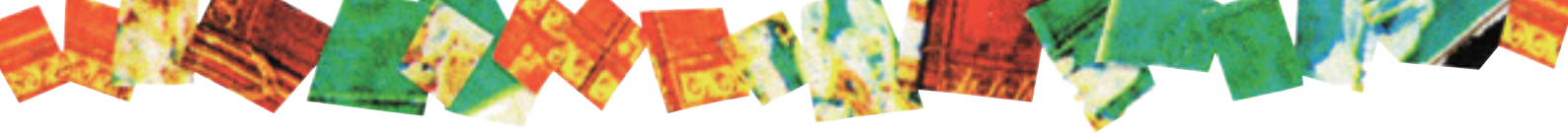
- 中央共同募金会の全国共通助成テーマである「つながりをたやさない社会づくり～あなたは一人じゃない～」を助成テーマとし先進的なとりくみを支援してまいります。また、地域福祉活動への『重点助成分野』を「誰をも受け入れ誰もが参加できる地域づくり」「健康でいきいきと暮らし続けられる地域づくり」「生きづらさを抱える子ども・若者とその家族への支援」「災害ボランティア活動・防災・減災活動への支援」「生活に困難を抱える人々たちへの緊急支援」とし、これらの活動を重点的に支援してまいります。
- 国内で大きな災害が発生した時は、共同募金は都道府県域を超えて、被災地で被災した人々たちを助ける活動の支援も行います。
- 寄付金には、税の特典があります。会社など法人の寄付金は、全額損金算入できます。個人の寄付金は、所得税の所得控除または税額控除、住民税の税額控除の対象になります。



赤い羽根おおさか

www.akaihane-osaka.or.jp/

募金の使いみちはすべて、ホームページに掲載されています。



アゴラ連載100回 改めて問う「集う場」の意味

本誌は2002年以来、「人々の集う場」を紹介する記事を掲載してきた。

02年4月号～09年1・2月号の「本誌が選ぶ3つ星なお店」（計57回）に続き、
09年4月号からは「アゴラ」をタイトルに冠し、店舗以外にも対象を広げて連載。

今号で100回の節目を迎えた。

各地でこうした「場」が生まれ、必要とされるのはなぜなのか。

100回を機に、過去に紹介した「場」を再訪し、
現代のアゴラが持つ意味や可能性を改めて考えた。

Agora ～人々が集う場所の場～ (第78回)

シマダチュプキタバタ

シマダチュプキタバタは、大阪府大阪市東淀川区にある、子供向けの学習・遊び場。店内には、絵本、玩具、学習用品が豊富に揃っており、子供たちが自由に遊ぶことができる。また、定期的なイベントやワークショップも開催されている。

代表者：シマダ チュプキ

住所：大阪府大阪市東淀川区西淀川1-1-1

電話：06-6540-1234

営業時間：10:00～18:00 (土・日・祝日)

Agora ～人々が集う場所の場～ (第79回)

「まほうのたがしやチロル堂」

「まほうのたがしやチロル堂」は、大阪府大阪市東淀川区にある、子供向けの学習・遊び場。店内には、絵本、玩具、学習用品が豊富に揃っており、子供たちが自由に遊ぶことができる。また、定期的なイベントやワークショップも開催されている。

代表者：まほうのたがしや

住所：大阪府大阪市東淀川区西淀川1-1-1

電話：06-6540-1234

営業時間：10:00～18:00 (土・日・祝日)

Agora ～人々が集う場所の場～ (第80回)

「TIFAカフェ・サバナ」

TIFAカフェ・サバナは、大阪府大阪市東淀川区にある、子供向けの学習・遊び場。店内には、絵本、玩具、学習用品が豊富に揃っており、子供たちが自由に遊ぶことができる。また、定期的なイベントやワークショップも開催されている。

代表者：TIFA

住所：大阪府大阪市東淀川区西淀川1-1-1

電話：06-6540-1234

営業時間：10:00～18:00 (土・日・祝日)

Agora ～人々が集う場所の場～ (第81回)

「さたけん家」

「さたけん家」は、大阪府大阪市東淀川区にある、子供向けの学習・遊び場。店内には、絵本、玩具、学習用品が豊富に揃っており、子供たちが自由に遊ぶことができる。また、定期的なイベントやワークショップも開催されている。

代表者：さたけん

住所：大阪府大阪市東淀川区西淀川1-1-1

電話：06-6540-1234

営業時間：10:00～18:00 (土・日・祝日)

特集チーム：華房 ひろ子、増田 宏幸、松村 圭一郎、村岡 正司、百瀬 真友美

地域に息づく「創造的な拠点」の物語

「Agora（アゴラ）」の第1回は2009年4月号。スタート時のタイトルは「おしゃべりアゴラ」だった。

大阪ボランティア協会は03、04年、市民活動と政治との関係を考える講座「市民と政治を考える『おしゃべりアゴラ』」を開催しており、アゴラの内容を検討している時に「あれをそのままタイトルにしてみたら？」という意見が出たことが編集委員会の議事録に残されている。アゴラには「前身」といえるコーナーがあった。創造的なアイデアの源泉

となる「場」を紹介する「本誌が選ぶ3つ星なお店」（途中2回の改題を経て『ウォロ』が選ぶ3つ星）で、02年4月号からアゴラに代わるまで計57回、居酒屋やレストラン、カフェ、本屋、フェアトレードショップ、コミュニティスペースなどを取り上げている。アゴラは「3つ星」を発展的に解消した新コーナーとして位置付けられ、当時の議事録には今につながる誌面の性格が列挙されている。もはや記憶には残っていないが、次のような声だ（一

部、字句修正を加えた）。

- ・市民自治の講座をやっている気づいたのは、ヒロバ系、たまり場系、そうした場所の必要性。
- ・そういうヒロバを紹介するという趣旨のページでどうだろう。
- ・3つ星では「主宰者の意見」は書いているが、地域コミュニティとしてどうなのか。その意見がない。
- ・（具体的には）拠点や場。自治会館、コミュニティカフェ。空き店舗、地域の場。

・そういう場にある物語を紹介する。拠点を作り出す物語。維持する物語。

アゴラは古代ギリシアの都市国家につくられた広場で、政治・経済にまがって市民生活の中心をなした。「おしゃべりアゴラ」の第1回、第29回には毎回「人々が出会い、熱い議論を交わし、創造的なアイデアが湧

き出る『現代のアゴラ』を紹介します」との紹介文が入っている。

「おしゃべり」が取れて現在の「Agora」市民が集う「いつもの場所」になったのは、ウォロが隔月刊化した14年4・5月号の第30回から。コーナーとしてはそれまでの見開き2ページからだいがコンパクトになったが、人々が集まる「場」の奥行き、それをつくった人の熱い、あるいは静かな、でも強い意志、そこでの出会いがもたらす変化と、生まれる新たな価値……といった、記事のエッセンスは変わらない。

紹介した100回（3つ星を含めると157回）の中には、今は閉まっていたり、状況が不明だったりする「場」もある。しかしバックナンバーをひもとけば、その時、そこに確かに存在していた熱量にまた出合える。時は移り人は変わっても、「アゴラ」なる場は存在し続けるだろう。

編集委員 増田 宏幸



「アゴラ」掲載店（2026年8月時点で「活動中」と確認できたもの）はQRコードから閲覧できます。

情報協力 岡村こず恵さん（甲南大学特任准教授、元大阪ボランティア協会事務局）

東日本大震災から15年「対話と交流」今も

「あれをとって、それではない、あれ。というような家の中のやりとりが、地震以来、力を取り戻した。身ぶりはさらに重要だ。被災地ではそれらが主にお互いのやりとりになる。(中略)身ぶり手ぶりで伝わる遺産の上に私たちは未来をさがす他はない……」(朝日新聞2011年3月31日夕刊、鶴見俊輔『身ぶり手ぶりから始めよう』より)

井上迅^{とん}さんが市民の座談の会「ブッダ・カフェ」を始めてから26年5月で15年がたった。生家である真宗大谷派の寺院、徳正寺と親交の深かった哲学者の鶴見さんが書いた、前出の記事から示唆を得たのがきっかけだ。当初は東日本大震災による原発事故を逃れ、京都に移住した避難者家族や支援者が「身ぶり手ぶりで」対話をし、安らぎの



ブッダカフェの様子(右奥は井上迅さん)



秋野不矩さんの作品をバックに、左から秋野不矩さん、鶴見俊輔さん、ガロ編集長の長井勝一さん、長井さんのパートナーの香田明子さん、今江祥智さん=1990年ごろ撮影(井上迅さん提供)

問 あなたにとって徳正寺(ブッダ・カフェ)とは?

ブッダ・カフェの
常連さんたちに聞きました

▷ブライス多佳子さん(初回から参加)

仏教寺院でありながら芸術家、思想家、表現者が集う前衛的な場。集った人同士で過去の事象をシェアし、希望の未来へとつなぐ場。生家にも感じる懐かしさや、多くの人たちに開かれた寛容さをもつ場。

▷小吹修三さん(初回から参加)

宗教的な場でありながら閉鎖的ではなく、それぞれが生きた時代や地域を越えて思考が開かれていくところ。どんな人でも垣根なく受け入れる雰囲気。

▷中野麻理子さん(2021年12月から参加)

流れのまま急ぐことなく、一つひとつの言葉とじっくり向き合いながら話ができる場。いろんな考え方に触れる機会が得られ、多角的に物事を見る視点を養える場。自分のありのままの思いを言葉にすることを、安心感をもって行える場。

時をもてる場として機能した。現在も毎月25日の午後、寺の座敷を会場にほとんど休むことなく続けられている。門前の案内板を見た人が喫茶店と間違えて訪ねることもあるが、温かく迎え入れ話の輪に加わってもらう。

徳正寺は桃山時代の1593年、現在の中京区に創建された。その後徳川家康による二条城築城に際し京都の中心地、下京区四条富小路^{とみこうじ}下ルに移転した。「先々代住職の祖父は、みずからアマチュア劇団を率いた演劇人でもありました。戦後間もないころ、公演で京

都に來た文学座や劇団民藝^{みんげい}、俳優座などの役者さんを寺で世話したり、皆が祖父を慕って出入りしたりしていたそうです」

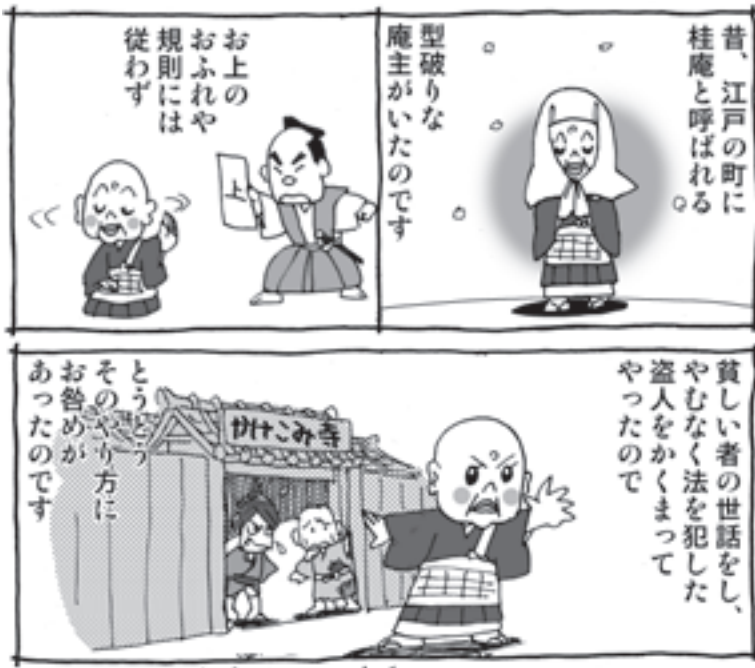
現在は住職を継ぎ、また扉野良人^{とひのら}のペンネームで執筆や詩作、出版も手がける迅さんはふりかえる。父の先代住職、等さんは、日本画家の秋野不矩^{ふく}さんの五男で陶芸家だった。母の章子^{しょう}さんもかつて書店のギャラリーで企画に携わったことから、芸術家や漫画家、出版人との交流圏を広げた。

祖母や両親の多彩な交友がきっかけ

うおろ君の
気にな〜る
ゼミナール

Vol.
150

「ケアの倫理」って？



まんが ■ ラッキー植松



同志社大学大学院
グローバルスタディーズ研究科教授

岡野 八代

「ケアの倫理」は、特定の文脈や関係性を注視しようとする倫理である。発達心理学者キャロル・ギリガン著『もうひとつの声で』(1982年)がその嚆矢となった。善悪の判断基準が成長と共に発達すると考える心理学が男性基準であるために、女性の道徳性の発達が男性より劣っていると評価されることに、彼女は疑問を呈した。

じつさい、彼女以前の心理学は、調査対象も依拠する思想家も男性に限られ、女性は原則の逸脱とみなされてきた。その根底には、人間の発達を他者(保護者)からの独立や分離と同一視する人間観と、あらゆる事例に適用可能な普遍的な価値を重視する正義観が存在していた。

当時合法化されたばかりの中絶の決断に悩む女性のインタビューを通じてギリガンは、権利や独立よりも、他者のニーズへの応答責任や関係性をめぐり道徳問題を考える「もうひとつの」倫理つまりケアの倫理を発見する。

ケアの倫理はその後、哲学や政治学に大きな影響を与えた。他者へのケアは歴史的に女性が多く担われてきたが、そのケア実践は、男性中心の人間観と、ケアを軽視する政治を大転換させる可能性を秘めているからだ。

ウォロ・バイダー、
いかがでしょうか？

ウォロ2年分(12冊)を
挟み込めるバイダー
(1冊500円+送料350円)です。
お問い合わせはウォロ編集部/office@osakavol.orgまで



いくPAの図書室 ～ふくろうの森～

大阪市生野区の御幸森小学校跡地に建設された多文化共生の拠点「いくのパーク」の一角に、NPO法人I K U N O・多文化ふらつとが運営する図書室「ふくろうの森」がある。2022年9月にオープンしたこの図書室の扉を開けると、ドーム型の秘密基地のような木造の書架が迎えてくれる。日本語の絵本や児童書などの他、ベトナム語、タガログ語、ベンガル語……など27言語1200冊の本が所蔵されている「Tomo-Tomo文庫」が目にとまる。

I K U N O・多文化ふらつとは(公財)日本国際交流センターが資金分配団体になっている休眠預金活用事業を通じて、住友商事(株)のプロボノ支援を受けている。Tomo-Tomo文庫は、同社の海外駐在員から現地の本を集め、図書室へ寄贈しようというアイデアから誕生した。運営の多くは「森番さん」と呼ばれるボランティアが担い、地域のおとなとして子どもたちを温かく見守る。森番さんが企画し、年数回開催しているのが多言語の絵本の読み聞かせだ。26年7月にはベトナム語、韓国・朝鮮語、ベンガル語での読み聞かせをした。生野区は韓国・朝鮮ルーツの住民が多いが、最近では他のアジアの国をルーツに持つ住民も増えている。地域で孤立しがちな小さな子どもとその母親が言葉を習得するために立ち上げた日本語クラスは、母子の居場所にもなっている。

ふくろうの森の理念は「だれもがここで『ほっと』できる場所」「だれもがそのままいていい場所」。多言語の絵本を置いているのも「あなたがここにいてくれてうれしい」というメッセージの一つだ。取材中も常連さんのおとななども、森番さんが楽しそうに会話をしていた。多文化ふらつとスタッフの藤井和代さん、橋本真菜さんは「○○人だから○○だ」とカテゴリーで見るとはではなく、日々の関わりの中から「○○さんという個人」に出会える場所になっている。この場所がなければ出会えなかった人もたくさんいる」と語る。

編集委員 久保 友美



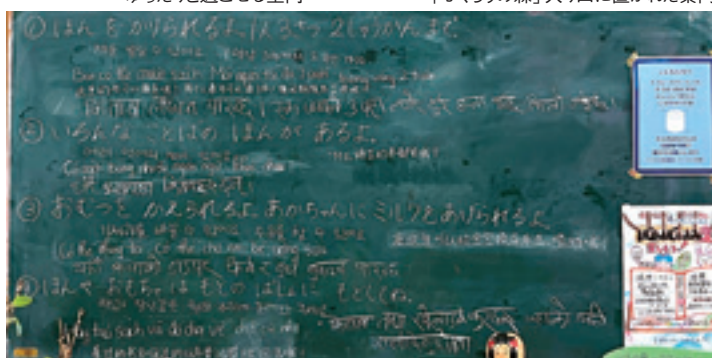
ドーム型の秘密基地のような書架 多言語の本が並ぶTomo-Tomo文庫



ゆったりと過ごせる室内



「ふくろうの森」入り口に置かれた案内



複数の言語で書かれた図書室の利用説明

いくPAの図書室 ～ふくろうの森～

大阪市生野区桃谷5丁目5-37 いくのコーライブズパークA棟1階
電話 06-6741-1123
開室時間 火・金曜日…14:00～17:00
土・日曜日…10:00～17:00

私の市民活動 Library (第76回)



大規模災害時の 広域避難と居住の復興

須沢 栄著
慶応義塾大学出版会、
2026年2月
4400円(税込み)

東 日本大震災(2011年3月)では福島第一原発事故で多くの住民が全国各地に避難した。岩手県でも、津波に遭った沿岸部から多くの被災者が県都盛岡市など内陸部に広域避難した。もともと過疎が進む被災地では、震災で生活基盤を失った人たちの内陸部へ移住する傾向はより強まっている。

盛岡市では、みなし仮設住宅などで避難生活をした被災者のうち「戻る」は2割半～3割、別の場所に「移る」が1割強で、約半数は「留まる」を選んだ。

「留まる」場合は、資力があって「持ち家」を確保した人が

いる一方、資力に乏しく「借家」を選んだ人たちもいて、その生活支援が大きな課題となった。

第1部は、広域避難において、避難元と避難先の自治体が異なることなどから複雑化した被災者支援制度の問題点を分析した。例えば、被災者に支援制度の情報が伝わらず、選べたはずの生活再建の経路を失った、支援制度の多くが避難元の自治体にひもづき、避難先での定住を希望すると制度が使えなかった、などである。

第2部は、盛岡市で避難者支援を担った一般社団法人SAVE IWATEの活動が中心である。発災4カ月前の「全

国町並みゼミ盛岡大会」で市との協働関係を築いたまちづくり団体が発災直後に結成。市の業務委託を受けて「もりおか復興支援センター」を運営し(26年3月活動終了)、避難者1009世帯の情報を市と共有。十数名の生活支援相談員が生活相談、見守り、内陸型災害公営住宅の入居や被災地への帰還を支援した。

17年から現地調査に入り、能登半島地震(24年1月)の石川県内における広域避難の実態も加筆した。広域避難は、今後の大規模災害でも起こりうる。そのために何をすべきかを実証的に提言した著作である。

編集委員 神野 武美